

東京女子医科大学における看護教育と実践力の探求 —看護学生が臨床看護学実習で実践力を養うこと—

原 三紀子（東京女子医科大学看護学部）

臨床看護学実習は看護学生が看護の実践力を養うための重要な場です。

3年次の成人看護学実習で看護学生が受け持ったAさんは悪性脳腫瘍により神経症状が徐々に悪化し、自立した生活や役割の遂行が困難となっていました。看護学生は身体的苦痛の軽減や気持ちに寄り添えるよう傾聴に努めました。実習終了後、病状がさらに悪化していったAさんから、「実習中、看護学生に自分の思いを聴いてもらったことで生きてきた意味を再確認できた」、「残された時間の中で、これから看護師になる看護学生達にメッセージを送りたい」という思いがプライマリナースに伝えられました。そのことがきっかけとなりAさんのための「語りの会」が実現しました。語りの会に参加した看護学生は、「Aさんから学んだことが自分の“看護の礎”になっていたことを再認識した」「患者さんの思いを真摯に聴くことの大切さが分かった」「医療チームにおける協働の重要性を実感した」など多くの学びを得ました。患者さんの気持ちにふれる機会を医療チームと共に持てたことは、学生にとってかけがえのない経験であり、看護の意味を確認する機会となりました。

臨床看護学実習は限られた時間の中で多くの学習課題を克服していく必要があるため、看護学生が自分のことで精一杯になると、患者さんの立場で考え、感じ取ることが希薄となり「自分目線」の看護になってしまうことがあります。看護学生が「患者目線」の看護にシフトできるためには、「感性」を育てていくことが大切となります。そのためには、「聴く力」「感じ取る力」「寄り添う力」を養うことが重要であり、患者・家族を含めた医療チームの協働が不可欠です。

この語りの会に至ったプロセスでは、学生の「聴く力」「感じ取る力」「寄り添う力」によって、患者さんが病気の体験の中に生きる意味を見出すことにつながったと考えます。これらの力は看護学生に内在する看護実践力であり、この3つの力が看護を拓いていくことにつながると考えます。

看護学生に内在する看護実践力

